

住まいと暮らしの未来学

「住まいのきのう、きょう、あす」

期日：平成6年10月28日(金)

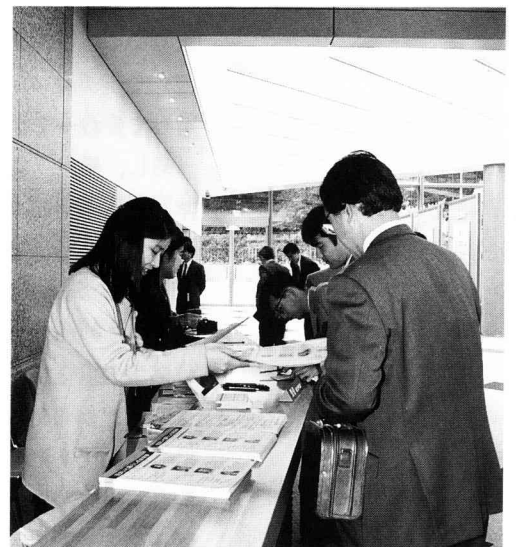
会場：住宅金融公庫本店すまい・るホール

主催：財団法人住宅生産振興財団・日本経済新聞社

後援：建設省、住宅金融公庫、住宅・都市整備公団



主催者挨拶をする財団大川専務理事



受付風景

講演 1

「変わる暮らし、変わらない暮らし — 猥宅からお宅まで —

道具と人間で生活空間

GK道具学研究所所長 山口昌伴氏

私はいっばしの建築士になって建て主と正面切って向い合うようになった時、「これまで私は“生活”していなかった」と初めて気づきました。生活の実態を極めて、はじめて住宅を設計できる。生活を知らない人が住宅を設計するのは無茶なことであるとわかったのです。

私は住宅設計を離れ、インダストリアルデザインを中心とするGKデザイングループの基礎研究部門に移りました。そこでわかったことは、道具が人を動かしているということです。高度成長期以来、急速に家電製品が普及

し、住宅の中の道具がどんどん変わっていることに、多くの住宅設計者は気がつかない。人と道具で空間ができていて、そこから住宅設計を根本的に考え直す必要があると私は考えました。

住宅という箱の中に詰め込まれつつある道具のありさま研究を通して、生活の場を見直していく必要がある。例えば電気洗濯機。どんどん大型化して一度にたくさんの洗濯をできるようにになったが、干した洗濯物をたたむ場所がベッドの上しかない。畳の部屋があれば放り出してのびのびと仕分けしたりできるのに。洗濯物はベッドルームの床に置くのがけがれる感じ。でも畳の上ならけがれ感がない。タタミは洗濯物をタタミ機能をもっている。そういうふうに床も道具として見直していくべきだと思うんです。

道具が空間を必要とし、そこに人がまつわ